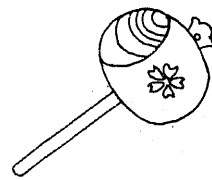
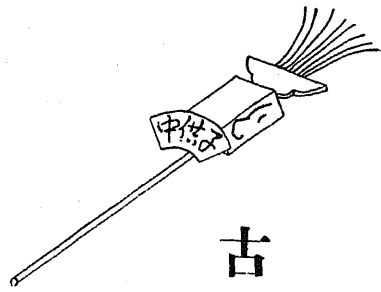


## 古きもの二つ

新庄 よしこ



唱歌遊戯が勃興してから、在來の傳統による童謡遊戯はすつかり影をひそめてしまひました、こはいへ、全くその跡を絶つこいふわけでは無く、次から次へこ新らしく作り出される唱歌遊戯におされて、一こき顧みられ無かつたこでも申しませうか。

一方は識者達が特に幼児の爲にこて、選んだ教育に關する材料であり、後者は、誰が作つたこも、何時ごろから始つたこもわからない子供のあそびであり、相共に、幼い人達にこつては何れを是とし、何れを非とするここの出來ない意義深いものでありませう。今日鐵筋コンクリートの園

舎に見る幼児の自由遊びに、思ひがけなくも、ふこ見いでた六十年前の童謡遊戯。私共もまた幼き日に、夕やみ迫る頃ほひ迄も遊びほうけたそれであるこを思ひ見る時、是等のおそびが持つ捨て難い執著が、かなり粘りづよい潜在力を以つて、幼い子供から子供へこ傳つて、その命脈をつないで來たこが思はれます。

その二三を擧げて見れば、

- 一、芋蟲こおろく、ひようたんほつくりこ
- 一、子を捕ろ子ころ
- 一、今年のぼたんはよい牡丹

一、こゝはぎこの細道ぢや

一、筍一本おくれ、まだ芽が一本

一、螢こい

一、大阪ぢやんけん負けるが勝ちよ

一、夕やけ小やけ明日天氣になあれ

一、蛙がなくから歸ろ

一、かごめく

何れも夫々に歌さあそびがついて居りますが、この中で近頃しきりに致して居りますものを一つ記して見ませう。

### 今年の牡丹はよい牡丹

鬼一人別に立ち、十人位(何人でもよろし)の一團手を

つなぎ輪になり歩き乍らうたふ。

今年のぼたんはよいぼたん、みイみをかからげてすつぼんぼ

ん、もう一つおまけにすつぼんぼん

鬼「入れて頂だいな

一同「いや

鬼「そんなら山へ行かない

一同「山蛇が出るからいや

鬼「ちや 川へ行きませう、

一同「皮がむけるからいや、

鬼「そんなら海へ行きませう、

一同「海坊主が出るからいや、

鬼「そんなこと云ふと、家の前へ來たら、天びん棒でぶつわ

よ、

「ちや 入れて上げるわ

こゝにて鬼は一同の中に入り、手をつなぎ圓形になりてうたふ。

一同「今年の牡丹はよい牡丹、みイみをかからげてすつぼんぼ

ん、もう一つおまけにすつぼんぼん

鬼一人又別になる。

鬼「私も歸るわ、

一同「どうして、

鬼「おひるごはんだから、

一同「おかすなアに。

鬼「蛇、

一同「生きてるの、死んでるの

鬼「生きてるの、

一同「さよりなら、

鬼は歸りかける。

一同「誰かさんのうしろに蛇が居る、

鬼「わたし？」

一同「いゝえ、

鬼「わたし、？」

一同「いゝえ、

鬼「わたし？」

一同「さう、

鬼が一同を追ひかける、こゝは鬼ごっこと同じ、つかまつた一人が鬼になつて、是れを繰り返す。

(二種の節がついてゐますが、音符にあらはせません適當に子供がふしづけすことと思ひます)。

これは、昔のものは、もつこ簡單で、こゝはも左の通り異つて居ります。

いれて頂だいな(いゝや)

山へ行きませう(お化けが出るからいや)

川へ行きませう(皮がむけるからいゝや)

そんな事云ふなら家の前へ来た時天びん棒で頭こつきりぶつてやる(痛いから入れてやる)

「今年のぼたんはよいぼたん」なごきは、誰か何時ごろ附け加へたものでございませう。遊んで居る中に、その仲間同志で、面白く變へもし、附け加へもするさいふ事も面白こごき存じます。

この遊びは、東京では諸々で行はれて居りまして、今更御紹介する迄もないは存じますが、鬼に角かうして、云ひ傳へ、口づたへに在來の遊びが、今尙行はれて居るのは、誠に嬉しいこごきでございます。さこからさも無く風のやうに傳つてくるこれら巷間の遊戲に云ひ知れぬ面白ささなつかしみを感じて、少しでもかういふ事を失ひ度くないさいふこころから記して見たのでございます。

こんな材料を持ち出して、お恥しうございますが、十何年ぶりですてみれば、やつぱり面白いので、昔つかつたらきて、何もむけに、すてしまふにも及ばないさと思はれて、又一つにはおはなしの新らしい方面へでもひらかれ

てゆけばこ存じますので、御紹介いたします。

詩の吟誦と同じことで、先生が二三度これを面白く讀んで聞かせ、あこは、一句づつを順々に幼児に云はせて見るのです。始めに先生が「ひいろいろ／＼インデアのこ云ひ、次には幼児が「ひいろいろ／＼インデアのこ一緒に云ひ、あこは、次々をこの方法で申して、全部を覚えてしまふわけでございます。

ひいろいろ／＼ インデアの

野原の中に しよんぼり

たつた一つの 停車場が

さびしくたつて居りました。

驛長さんのチャンダーと

荷物が、りのチャトナーと

たつた二人で住んで居た。

一日一度汽車が来て

たまに荷を上げ下ろす

外には何の用も無い。

二人はさみしく退風で

電話を次の驛にかけ

「夕べの月はよかつたね、

今朝のおかずは何たべた

今日こそ雨は降るまいね」

又或る時は眞夜中に

「大變々々 大地震

瓦がガラ／＼ おつこちて

驛長さんが怪我をした

早く助けに来て下さい」

ほんとうらしく云ひました。

ところが或晩チャンダーと

チャトナー二人でいろ／＼と

話をして居るまん中に

大きな虎がとび込んで

驛長さんをつかみ。

チャトナーさんはびつくりし、

やつとの事で云ひました。

「虎 虎がやつて来て

驛長さんに飛びついた

助けて下さい大急ぎ」

「又始つた いたづらが

折角氣持のいゝ夢を

見てゐたところをチャトナー奴

是からベルが鳴つたとて

起きて取次ぎするものか」

あくる日汽車が着いた時

チャンダーさんの古靴と

チャトナー君のステツキと

外には人の影も無い。

どうした事かと機關手が

ブラットホームに来て見れば

大きな虎の足跡が

あちらこちらについて居た。

詩の吟誦ミ違つて、面白いことには、言葉に、相當する身振りをつけながらいたします。一つ二つ先生が示せば、あゝはめいゝ幼兒の創案になるジュスチヤーミ共に苦も無く覚え込んでしまひませう。遊戯ミは異り、自分の、是れミ思ふ動作を勝手につけて居ります。例へば、一日一度汽車が来てミは兩手で車の動く様、大變々々大地震、こゝは子供が誠にうまく表しましたし、又、一番面白いらしうございます。虎の動作は、兩手の五指をひろげて、ミびかゝる眞似、又始つた……は眠る、ミ云つた工合に、いたして居ります。

調子がいゝのミ、この身振りミで、思ひの外早く覺えてしまつて、氣が向けばたつた一人でもやつて居るのを時々見うけます。

それで一寸氣がかりなのは、意味が残酷ではないかミ、いふ事ですが、それは大人が、特にそののみを取り出して談話の理想的條件に照らし合した時ばかりの懸念で、狼が羊を食べてしまつたのを、何ミも感じないミ同じこミで大した事でもございませう。